派遣報告書

2011 年 4 月 15 日

１、氏名
　福嶋伸洋

２、派遣先
　ポルトガル・カトリック大学（リスボン）

３、派遣期間
　2011 年 2 月 5 日ー4 月 5 日

４、派遣の概要および成果
　今回の派遣は、フェルナンド・ペソーアを中心に、世紀転換期から二〇世紀前半に活動したポルトガルの詩人の作品における、ポルトガル〈近代〉の現れを探求することを目標としていた。その際、足がかりのひとつとして、この国における〈近代〉の中心ともいうべき首都リスボンの表象の仕方を、詩作品のなかに追っていくことを考えていた。
　ポルトガル・カトリック大学では、カルロス・モルジャォン教授に指導をあおぎ、ペソーアの（また同時代の他の詩人の）リスボン表象について研究するにあたって、ポルトガルで逸早くボードレールの詩学を取り込んだセザーリオ・ヴェルデを看過することはできないことなど、示唆いただいた。また、オデュッセウスが築いた街だという伝説も残されているリスボン「神話」については、「オリシポグラフォ」（「オデュッセウスの都市の歴史家」の意）と呼ばれる多くの書き手が著作を残していること、さらに、より「客観的な」歴史については、アウグスト・フランサらの社会史文献を参照すべきこともあわせて教唆いただいた。
　フェルナンド・ペソーアが実際に生き、それについて旺盛に記述した街リスボンには、詩人にまつわる「場所」が現在も残っている。今回の派遣で、ペソーアの生家、二番目の家、晩年を過ごした家を訪れることができたのは、現地調査ならではのメリットだった。

とくに晩年の家は、現在は「フェルナンド・ペソーア博物館」として、詩人にまつわる文献を集積した研究スペースにもなっており、必要な文献・資料に目星をつけてゆくための助けとなった。同博物館では、ペソーアの蔵書が、現在は整理中のため公開はされていなかったものの、すでにリスト化はされており、今後、詩人の思想の源を探ってゆくのにおおいに役立つと思われる。なかでも、フロイトの著書で唯一、『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年時代』のフランス語訳をペソーアが所有していたことは、派遣者にとってきわめて興味深い事実だった。

今回の調査では、リスボンの表象を絵画の領域でも追った。シアード美術館では、セザーリオ・ヴェルデやペソーアの同時代人でもある十九世紀を代表する画家コルンバーノの回顧展を見ることができたし、リスボン美術館では、二〇世紀の画家カルロス・ボテーリョらの作品を見ることができた。実作を目にすることはできなかったものの、《古きリスボン》シリーズで、二〇世紀初めのリスボンの風景を失われてゆくものとして描いた水彩画家ロッケ・ガメイロの存在を知ることができたのも、今回の大きな成果のひとつだった。

５、今後の課題

調査を終えた現在、派遣者には、結果を論文にするにあたって、ふたつの方向があるように思えている。

ひとつは、当初の計画に沿って、ペソーア作品（アウヴァロ・デ・カンポス名義の詩、遺稿『リスボンで観光客は何を見るべきか』、ベルナルド・ソアレス名義の『不安の書』など）におけるリスボンの表象を、ポルトガル〈近代〉の問題として考えてゆく、というものである。ペソーアがさまざまな形の「理想化」を試みた幼年時代のリスボンと、青年期に帰還してのち住み続けた生活の場リスボンとの乖離は、詩人の「ファミリーロマンス」をめぐる問題やナショナリズム思想の中心にある問題と重なるものであると、派遣者は推測している。

もうひとつは、派遣者のアクチュアルな関心に沿う形で、『不安の書』などにおけるペソーア思想について考えてゆく、というものである。